SMF Press Vol. 16 2013 12.9
SMF Saitama Muse Forum

さんなすびの縁結び—新潟「里山アート展」での実践報告

里山アート展（註1）の開幕を見届けて豊実から帰京した翌日、主催者の佐藤賢太郎氏から「君の思うつぼに嵌まってきましたね」と、連絡を受けた。協力者の古山さんが断然張り切っているとのことであった。

ことの始まりは年明けの「さんなすび展&アート寺子屋」でのプレゼンテーションにある。石上城行氏の大きな粘土製のドームを野焼きするプランに目が留まった。彼は子供の頃より体内くぐりに変身願望を持っていたらしい。奇しくも我々は、籾殻を使った炭焼や土器素焼の試みから大規模な野焼きを構想、縄文より続く里山の概念に未来を拓くヒントが潜んでいると考えていた。

早速、石上氏へ提案すると、二つ返事で賛同が得られ、「里山アート展」での大型オブジェの制作と籾殻による野焼に共同で臨むことになった（註2）。

2011年12月の回遊美術館で、北浦和西口商店街でのゲル（モンゴルの移動式住居）の組立を、石上氏の計らいで埼玉大学の学生と一緒に行ったことが、石上先生との最初の協働であった。今度は石上氏自身の出番となった。

9月、石上氏と共に粘土を満載したトラックで、里山アート展の会場となる阿賀野川中流域の山中、豊実へ赴いた。ここでは限界集落となった故郷に戻った彫刻家、佐藤賢太郎氏を中心にコスモ夢舞台が生まれ、「循環・再生、創造性」を謳い上げ、棚田での野外展が続けられてきた。

遠隔地であるが故に我々の滞在期間は限られ、有効に作業を進めねばならない。会期前に制作し、オープンに合わせて着火、そして窯出しと、9～10月にかけて都合3度の現地入りを計画する。この間に日出谷小学校でワークショップが行われることにもなった（写真A）。

A

あいにく荒天が続く。もちろん屋根をつくってその下での作業ではあるが、粘土は乾燥を拒み落ち着くことがない。それでも、石上氏は制作を進めて両壁から立ち上げ、翌日には幾本もの支柱で補強しながら天井部へと移行した。ところが、積み上げた土壁の腰が折れ、地響きとともに崩れ落ちてしまった。瓦礫を前に呆然とたたずむ石上氏の姿が、そこにあった。

その晩、我々は緊迫した面持ちで対策会議を開き対策を練り、一枚の湾曲した壁のかたちに設計を変更した。だが、滞在期間のリミットが迫る。

翌朝、黙々と粘土を積み上げる石上氏の姿は、神々しく見えた。驚くことに、ほぼ一日で作業を進行させたのである（写真B）。

B

いよいよ籾殻への着火の手はずも整い10月の開幕を迎えた。数日後に屋根と囲いを取り払うと、中から見事に焼き上がったオブジェと子供たちの作品が姿を現す手はずである（写真C.D）。ところが、問題は残った。燻炭になると量が減るので、熱量を保つには籾殻の補給が欠かせない。誰が行うかである。

C

D

E

ここで注視されたいことがある。屋根の設置には、豊実の集落に住む古山武夫氏のご協力を仰いだ。見事なチェーンソーの捌きと手際の良い組立により、半日で建て上げられた（写真E）。おかげで雨の中での作業が可能となったのである。そればかりか、我々の帰京中に近郊の農家から籾殻が搬入されるため、トタン囲いまでを依頼していた。そして、さらに着火後の籾殻の補給があった。しかし、主催者が面倒を見るのならば必然だとしても、責任のない古山氏に過大な負担を押し付けるのは遺憾である。一旦はお願いしたものの、帰京直前に補給するまでで、後は成り行きに任すしかないと考え直し、お断りを申し出た。

ところがどうしたことか、ありがたいことに古山さんが断然張り切ってくださったと言う。それを「思うつぼですね」と言われたのだが、私としては決して煽動したつもりはなく、無理なお願いだと判断し取り下げたまでのことであった。人の心の動きは計り知れない。アートプロジェクトの現場では、意図することと意図せぬことが交差して予期せぬ展開を引き起こす。人と人との出会いから協働は始まるとはいえ、罪深くもある。

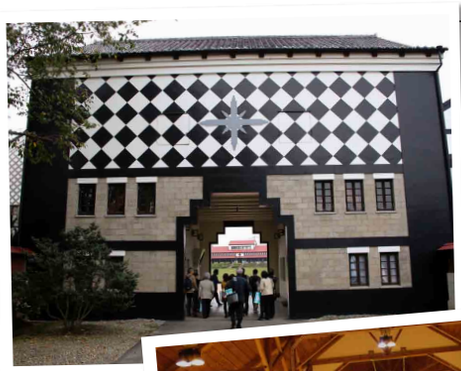
報告者:吉田富久一、長谷川千賀子（社会芸術／ユニットウルス）

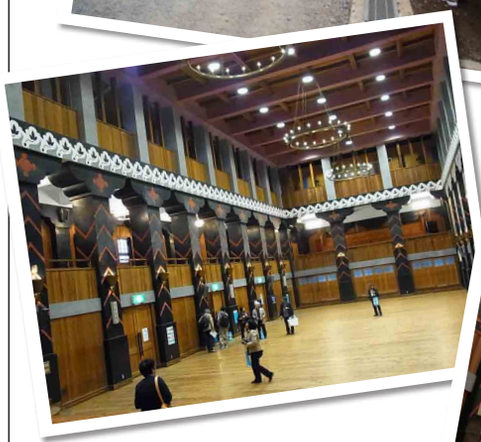
（註1）「第10回 里山アート展」2013年10月13日～11月3日、新潟県阿賀町豊実。主催はNPO法人コスモ夢舞台
我々社会芸術ユニット・ウルス（吉田富久一、長谷川千賀子）では埼玉大学の石上城行氏とともに、氏の構想した大きな粘土オブジェをつくり野焼きする共同プロジェクトを結成。炭窯の設置と合わせて、もみ殻を使った二つのアートワークを行う。日出谷小学校でのワークショップが取り入れられ、子どもたちの作品も一緒に焼かれる。他に、田圃夢舞台の芸能、稲刈り体験（写真F）あり。シンポジウムでは、佐藤賢太郎(コスモ夢舞台)と吉田富久一(社会芸術)との対談があった（写真G）。

（註2）「社会芸術Vol.3『ウルスの泉』」p.46「里山アート展における龍神プロジェクト」p.47「記憶の容（うつわ）プロジェクト2013 in 豊実企画書」参照。

F

G





▲入間市博物館アリット 方丈庵、「田中芳 展」見学

東野高等学校見学ツアー

SMF@入間が10月19日(土)に開催されたなかで、東野高等学校ツアーが実施された。

東野高等学校の現校舎は、1985年にクリストファ・アレグザンダーの設計により建築された。アレグザンダーは世界の建築家から尊敬される人だが、実作は少ない。

僕は開校から間もない時期に校内を拝見したことがあり、個々の建築物の独特な意匠だけでなく、建築群がつくる風景の美しさにもひかれた。
建ってから30年ほどを経て手直しが必要になり、改修が進行中ときいていたので、どのように変わっているか、いくらかの不安を感じながら訪れた。

改修されたのは、バリアフリー対応や冷暖房など、生活感覚の変化にあわせて変わっていくことが自然なことがらで、独特の意匠が損なわれてはいないように僕には思えた。この学校を初めて訪れた参加者も魅惑されたようで、しきりに写真を撮っていた。

さらにこれからどう変化していくのだろうと考えながら見てまわるうち、僕は2つのことを思い浮かべていた。

1つは、埼玉県内でやはりユニークな学校建築として知られる宮代町立笠原小学校のこと。見学に訪れたとき校長先生から聞いた話で、卒業生が婚約者を連れてきて、「ここが僕が卒業した学校だよ」と教えていたという。東野高等学校でもそのようであるといい。

2つ目は、NHK・Eテレ『高校講座・美術』でのアーティスト、奈良美智のことば。高校生が作品を作るのを奈良が指導するというワークショップで、ひとりの生徒が独特な色の塗り方をしているのを見いだして、奈良がこういう。「自分だけのものっていうのは、人と比べることができない。それはすごくいいこと。人と比べられたら差がつく。比べられないものをやっていけば、自分の努力しだいでドンドンドンドン自分を高めていける」。アレグザンダーのいう「名付けえない質」を「比べられないもの」といっていいのではと思う。

埼玉県内には見ごたえのある学校建築がそろっている。東野高校（アレグザンダー）、立正大学（槇文彦）、宮代町立笠原小学校（象設計集団）、埼玉県立大学（山本理顕）があって、4校を結ぶと十字になるので、僕は星座になぞらえて埼玉十字星と名づけている。それぞれで学ぶ人たちが誇りをもって卒業していってほしいと思う。（Y.W）

執筆：(Y.W)渡辺恭伸
編集：SMF広報委員会　発行：Saitama Muse Forum　〒330-0061　埼玉県さいたま市浦和区常盤9-30-1　埼玉県立近代美術館内
問い合わせ：SMF.info@artplatform.jp